

毎週、周辺の検査があり、読むものは徹底的に取り上げられてしまい、読みたいという意欲はいっぱいだった。そうした中に、書類による徹底した共產教育が開始された。熊沢天皇等のようなものが配布されたが、余り効果はなかった。

とにかく、強制労働の苦痛は現在になっても明確に思い出され、そして、生き抜いて帰国できたことを喜んでいる。そして、シベリアにおいて亡くなられた戦友のご冥福を祈る。

ダモイ東京とはシベリアであった

岐阜県 鈴木善三

昭和二十年八月十五日、正午、重大放送があるので全員ラジオを聞くようにとの部隊長の指令がありました。スイッチをいれると、はるか日本海をわたって伝わる電波は雑音が多くてなかなかキャッチ出来ませんでした。が、そのうち特徴のある陛下のお声が聞こえてきまし

た。耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びとせつせつと訴えられる悲痛な放送を聞きながら、私達はぼうだとして、あふれ出る涙で何もかも見えなくなったのを、つい昨日の出来事のように思い出します。その日から我々にとって生涯忘れることのできない屈辱と悔恨の日々が始まりました。

部隊を放棄、南新京集結、武装解除と目まぐるしい数日が暮れていきました。丸裸のただの人間集団に変わった我々は、毎日のように使役にかり出されました。そして、其の行き先とは皮肉なことに、ついこの間までの私の部隊であった関東軍野戦貨物廠新京支廠です。山のようには野積みされた軍事物資をソ連へ輸送するための積込作業です。これが約一か月あまり続きました。そんな仕事有一段落の十月初旬、新京残留の全員が駅前に集結させられました。集まった約千人の日本人を前にして、ソ連軍司令官が演説をしました。「貴方達は永い間、日本軍閥のため苦しめられてきましたが、ようやく解放され、内地へ帰ることが出来るのです。なにとぞこれからは幸福な生活を送って下さい」と。そして、捕虜として

のいまいしい日々が始まりました。北上を続けた貨車は、途中孫呉、北安などで何日間も停車をくり返しなから、黒河に到着したのは十一月の末でした。

すでに凍結した河のうえをソリに食料品、その他をのせ、対岸のブラゴエシチエンスクの駅にまづ貨物列車に積みこむため、三回往復をいたしました。深夜のこととてこおりつくような寒さのため、落伍する友が続出し始めました。たおれて眠れば、それで終わりです。即ち凍死です。最後尾の指揮を受けもった私は、それらの兵を叱咤激励、時にはなぐりつけるようにして、ともかく全員無事に列車の乗り継ぎに成功しました。その時点では、まだ内地へ帰れるの一心でした。真夜中に発車し始めた列車は翌日の八時頃停車、用便のため下車を許されました。荒涼たる原野にただ、駅舎のあるだけの駅でしたが、驚いたのは見渡す限りの糞の山でした。何十万人の日本人移動のきずあとです。列車の進行方向がウラジオオではなく、モスコであることをつげた。ロシア人のあわれむようなまなざしと、私達の受けた衝撃の大きさを、今だに忘れることができません。帰国の望みを完全

にたたれた失意の集団をあざわらうように列車は走り続けました。やがて窓外に海かと思われる水辺を通りすぎて行きます。それがバイカル湖であったわけです。十二月二十八日、目的地のイルクーツク第六収容所へ到着、白樺の木を組み合わせただけのそまつな兵舎でした。今後何年ここで生活をするのか、はたして命ながらえて祖国の土を踏むことが出来るのか、まさにあんなたる正月を迎えたのです。昭和二十一年一月三日より作業が始まりました。伐採と木材の引き出しです。二人一組で雪深い山奥より切り倒された材木をロープでひっぱり、トラックのまつところまではこぶのです。そんな作業が雪どけとともに今度は鉄道工事にかかりました。山と山との谷間に橋をかけ、左右両方の山より無蓋車に満載された土砂を、一台に六人づつでおろしていくのです。おろし終わってホッとするまもなく、つぎの貨車がきてまっております。そのような労働が昼、夜間、徹夜の三交替で、約六か月続きました。そして、谷がうまり、レールがふせつ、列車が開通いたしました。これが第二シベリア鉄道の工事であつたわけです。食事といえば、高粱、

粟、豆類等、これはすべて馬糧として貨物廠にたくわえられていたものです。それがなくなると一きれの黒パンと飯盒のふた一ぱいの塩汁、これで栄養失調にならないのが不思議なくらいです。私は幸せなことにハラシヨウラボウターとして帰国第一陣にはいつて、比較的早期に帰還出来ましたが、今、當時をふり返って思い起こすとき、日本人として最も恥すべきことは、自分の保身のためには、平気で仲間さえも裏切り、ソ連側に通報した人間が多数あったこと、そのため、どれだけ我々の苦しみが増加したかはかり知れないのです。

あの北斗七星のましたでの抑留中には想像出来なかった現在の我が身の幸福をありがたく思うとともに、せめて私達の元氣なうちに、収容所の裏山などに大きな穴を掘って、うめられている多くの戦友達の遺骨を収集して、それぞれの故郷の土に葬ってやらねばと今はただそれだけを思う毎日であり、年老いていく我々にとって焦燥の感、ひとしおの昨今です。

格子なき牢獄

東京都 石山 権 作

部隊は新京で終戦を迎え、ある所でソ連の武装解除を受く。そして公主嶺に集結する。しばらくして黒河省に連れてこられ、そこで十二月まで物資運搬の労に服す。十月に入ると寒さもぐんと強まり、十二月には黒龍江が完全に凍ってしまった。そして我々も氷上を渡り、ウラゴエチエンスクに連行さる。そこより列車に乗る。どこへ連れていかれるのか皆目見当もつかず、不安の気持ちでいっぱいだった。

列車内は、中央に一つ大きなストーブが据えつけられ、両側が段になっていて、スシ詰状態で寝起きするのがやっとだった。最初はたくものもたくさんあったので、ストーブが真っ赤になるまでたいた。しかし、熱は上部のみに回り、汗をかくほど暑かったが、下部両側は全く冷蔵庫で、鉄飯には氷の花が咲いていた。